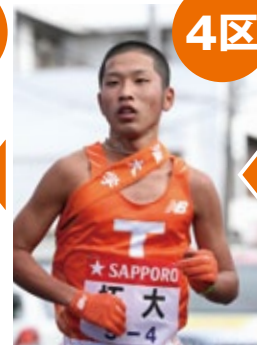


第91回東京箱根間往復大学駅伝競走
総合成績

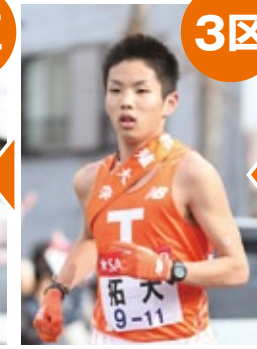
順位	大学名	時間
1	青山学院大学	10時間49分27秒
2	駒澤大学	11時間00分17秒
3	東洋大学	11時間01分22秒
?		
16	拓殖大学	11時間18分24秒



尾上 慎太郎
商学部 経営学科4年 (長崎県立松浦高校)
区間8位 1時間21分15秒



西 智也
商学部 経営学科1年 (熊本県立球磨工業高校)
区間11位 56分35秒



東島 彰吾
商学部 経営学科3年 (佐賀県立鳥栖工業高校)
区間14位 1時間5分



金森 寛人 (副主将)
商学部 経営学科3年 (新潟県 関根学園)
区間13位 1時間10分8秒



佐護 啓輔 (主将)
商学部 経営学科4年 (長崎県立西彼杵高校)
区間8位 1時間2分38秒



桜井 一樹
商学部 経営学科4年 (群馬県 前橋育英高校)
区間15位 1時間11分50秒



羽山 健
商学部 経営学科3年 (東京都 東京実業高校)
区間17位 1時間12分12秒



宇田 朋史
商学部 経営学科2年 (埼玉県立熊谷高校)
区間18位 1時間8分31秒



新井 裕崇
商学部 経営学科2年 (鳥取県 米子松陰高校)
区間20位 1時間7分8秒



大島 千幸
商学部 経営学科4年 (熊本県立人吉高校)
区間20位 1時間3分7秒

応援ありがとうでした

陸上競技部
箱根駅伝

「応援ありがとうございませした。過去最高順位、2年連続のシード権獲得を目標に挑みましたが、期待に応えられず悔しいです、申し訳ない気持ちでいっぱいですが、結果を考えるとまだ甘かったのかも知れません。この悔しさを忘れずに後輩たちには頑張ってください。卒業後は先輩たちのいる安川電機に入社しマラソン選手を目指します。」

佐護 啓輔
主将

「往路は予定通りだった。復路6区の大島の体調が万全でなかったが、前回の実績もあり行けると信じて送り出した。結果の責任はすべて監督にあり、とても悔しく思っています。しっかりと鍛え直して10月の予選会に挑みます。そして必ず本戦に出場し、シード権を獲得します。今後とも応援よろしくお願いします。」

岡田 正裕
監督

予選通りだった往路
拓殖大も箱根の「魔物」に襲われた一校だった。総合成績は11時間18分24秒。前回3位の日体大と同タイムだったが、個人順位の優劣で16位に終わった。往路が終わった時点では11位。シード圏内まではわずかに11秒差だった。出場チームの監督会議が行われた箱根ホテルで岡田監督と立ち話をした際「こまでは予定通り。」

流れに乗れなかった復路
アクシデントに見舞われた場合の巻き返しは容易ではない。追う者の「強み」は学生駅伝の場合、前に見ただけでなく、余裕のあるペースでも相手が見えない状況に陥る。前がなかなか見えない場合には想像以上にペース設定は難しくなる。拓殖大も7区以降は前方を追わなければいけない焦りから、前半に力を使い、後半にペースを落とす悪循環に陥ってしまった。9区の戸塚中継所では、

アクシデントの多かった大会
青山学院大が10時間49分27秒と、驚異的なタイムで217.1kmを駆け抜けた今大会、箱根駅伝史上16校目となる総合優勝という新風が吹いた一方で、アクシデントがこま多大会も珍しい。幸い、途中棄権はなかったが、優勝候補筆頭だった駒澤大は5区の馬場翔大選手(3年)が低体温症に陥り、何度も転倒。1位から4位に順位を落とした。9区までシード圏内の8位にいた中央大もアンカーの多田要選手(4年)がひざの故障でペースダウンし、19位まで下げてしまった。山梨学院大はケニア人留学生のエノック・オムワンバ選手(3年)が、レース3日前の練習で右アキレスけんの故障。神奈川大や順天堂大も病気やけがなどで予定していた選手を変えざるを得なかった。

戦いは始まった!!
報知新聞記者が見た箱根駅伝
文/遠藤 洋之(報知新聞社 編集局運動第二部)
1月2、3日に行われた箱根駅伝で拓殖大は11時間18分24秒の16位。前大会に続く2年連続のシード権獲得はならなかった。往路では1区・佐護啓輔主将が8位に入るなど、流れをつかんで総合でも11位だったが、復路では6区の大島千幸選手が区間20位と力を出せずに、シード権争いから後退した。予選会からリベンジを期す次回に向け、残された選手の戦いは始まった。

立川決戦を勝ち抜く強さを
近年、予選会もレベルが高くなってきている。次回も日体大や中大、順大と言った名門校に加え、今大会の出場を逃した東農大や法大もリベンジを期して挑んでくるだろう。最初の勝負となる10月の立川決戦まで、選手には自らに、そしてライバルに勝ち抜く強さを身に付け、新たな勝負に挑んでほしい。

スピード選手の育成も
次大会は予選会からの参戦を目指すことになる。シード権奪回のために何が必要なのか。端的に言えば、2つのタイプのエースを育てるというところだろう。1つはトラックでトップクラスのスピードを持つ選手、もう1つはひとりでもペースを維持できるロードに強い選手だ。今大会上位10校のうち9校は、3区までに10位以内に入り、粘り込みを決めていた。「流れ」も大事だが、波に乗るにはスピードのある選手をつぎ込む必要がある。1区は佐護啓輔選手は、その力があつたが、今年3月で卒業。2区は金森寛人選手(3年)は、トラックでも5000m14分11秒で走れる力があるだけに、スピードに磨きをかけてエースに育ってほしいと感じている選手の1人だ。あとは、岡田監督が得意とするロード特性の高い選手と、尾上慎太郎選手、大島選手が抜ける山岳区間の核を育成できれば、10番手以内に入る総合11時間11分台のタイムに近づけることはできる。

復路には自信がある」と笑みを浮かべていた。だが、6区の大島千幸選手は上りが終わった芦之湯を過ぎたあたりから遅れ始め、前回より2分以内も遅いタイムで、区間20位でのリレーとなった。

1997年大会3区以来、18年ぶりの繰り上げスタート。流れは最後まで取り戻すことができないまま、ゴールを迎えてしまった。岡田監督も「駅伝と言ったのは不思議なもので、上位でタスキを受けるといい走りができる。流れに乗れずに残念」と復路を振り返った。



レース後、大手町サンケイプラザ4階で行われた箱根駅伝応援慰労会であいさつする岡田監督と選手たち